

徳丸流神楽の成立と展開

— 民族音楽学的芸能史研究 —

The Formation and Development of the Tokumaru-ryū Kagura:

A Contribution to the History of Performing Arts with an Ethnomusicological Approach

川崎 瑞穂 KAWASAKI Mizuho

筆者は2008年以来、埼玉県秩父市旧荒川村（荒川白久^{しろく}）に伝承されている神明社神楽という民俗芸能の調査・研究を行ってきた。神明社神楽は、白久地域の神明社という神社の里神楽である。毎年3月第2日曜日の春祭り、7月最終日曜日の川瀬祭り、そして11月23日の秋祭りに際して執り行われている。その他、1月3日には番場町の秩父神社で、4月20日には旧大滝村大達原の稲荷神社でも奉納されているほか、近年は「道の駅ちちぶ」で毎年5月に開催される「平成秩父座公演」においても上演されるようになった。

この神楽は、演目構成（冒頭に素面の演目がある、記紀神話を題材にする、等）や楽器編成（篠笛、締太鼓、太鼓）といった形態的側面においては、いわゆる「出雲流神楽」と一括される、関東一円の里神楽に分類することができる。神明社神楽には17の演目があり、それぞれの演目に囃子が1～8曲付されている。神明社神楽の囃子は計22曲（神楽の始まりを告げる屋台囃子（ヨビダイコ）を加えると23曲）あり、関東の里神楽の中でも曲数が多い方であるといえる。

神明社神楽の歴史を物語る史料はほとんど存在しない。しかし、現在の神明社神楽の師匠である濱中彌傳治氏は、豊富な口頭伝承を有する。神明社神楽は、濱中氏の有する伝承によれば、江戸の明和年間（1764 - 1772）頃にはすでに行われていたという。そして文化年間（1804 - 1817）には、新井三平という人物が神明社神楽の師匠を務めていたことが、伊勢太々講の鑑札であると思われる「永代大々御神楽講印札」（新井三平の子孫、新井竹五郎氏蔵）という木札の存在からわかっている。この時期の神楽について重要なことは、それが「伊勢神楽」の流れを汲むものであったと言われていることである。この伊勢神楽という芸能がどのようなものだったのかということとは判然としないが、神明社神楽の冒頭3座、すなわち「奉幣」^{ほうへい}「国堅」^{くにがため}「国抵立座」^{くにとこぎ}にはその名残があるのだといわれている。現行の神楽の形態が完成したのは江戸の安政年間（1854 - 1859）であるといわれ、この頃、群馬県方面から来秩した「徳丸」という人物が、歌舞伎の所作の多く入った神楽を伝授したという。それゆえこの神楽は「徳丸流神楽」とも呼ばれている。

筆者は修士論文「秩父市荒川白久「神明社神楽」とその音楽に関する構造人類学的研究」（国立音楽大学大学院、2013）において、フランスの文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロース Claude Lévi-Strauss の構造分析の手法を用いて、神明社神楽の共時的研究を行った。これまでの秩父地方の神楽に関する先行研究では、この神楽はその史料の少なさゆえに通時的研究から度外視され

てきたが、筆者が修士論文において神明社神楽の共時態を研究対象とした理由の1つもそこに求められる。しかし、神明社神楽から派生した2つの神楽を視野に入れることで、これらの芸能のある時期からの歴史はかなり明確なものとなるのが、その後の調査によって判明した。

神明社神楽の伝承される白久地域の隣に位置する日野地域には、神明社神楽と同系統の神楽が伝承されている。正式名称を「^{せんげん}浅間神社附属神楽」とするこの神楽は、^{おとふじやま}弟富士山の麓に鎮座する浅間神社において、毎年4月第2日曜日の例大祭、11月23日の秋季大祭、2月3日の節分祭に際して執り行われるほか、4月第3日曜日には旧荒川村上田野地域に鎮座する^{わかみこ}若御子神社の例大祭でも奉納されている。こちらも近年は「平成秩父座公演」において上演されるようになった。

浅間神社神楽には、座外の演目を加えると22の演目があり、こちらはそれぞれの演目に囃子が1~6曲付されている。楽器は神明社神楽と同様、篠笛・締太鼓・太鼓である。浅間神社神楽の囃子は計20曲で、こちらにも、神楽の始まりを告げる屋台囃子（ヨビダイコ）があり、これを加えると計21曲である。

この神楽も、安政年間（1854 - 1859）に徳丸が手を加えることによって現在の形になったとされているため、「徳丸流神楽」と呼ばれている。神明社神楽にはほとんど史料が存在しないのに対し、浅間神社神楽には2つの重要な史料が存在する。1つは安政4年（1857）成立とされる『太々神楽連名帳』、もう1つは昭和5年（1930）から昭和61年（1986）にかけて書き継がれた『太々御神楽座組帳』（約20冊）である。『太々神楽連名帳』によると、日野地域では徳丸流神楽以前に、毎年1度、石井神主によって「^{みこかくら}神子神楽」が行われていたという。

「三峰神代神楽」（以下、他地域の呼称に合わせ、三峯神社神楽と表記）も、明治22年（1889）、白久地域の人々が旧大滝村滝ノ沢地区の人々に神楽を伝えたことにはじまったものであるため、「徳丸流神楽」と呼ばれている。滝ノ沢地区では毎年4月8日、稲荷神社大祭に際してこの神楽が奉納されていたが、滝ノ沢地区の人々がその後の明治27年（1894）に、三峯神社において奉納するようになってのち、「三峰神代神楽」として毎年奉納されるようになった。その後、滝ノ沢地区は「滝沢ダム」の建設（2011年完成）によって水没し、稲荷神社大祭での奉納はなくなった。

この神楽は、三峯神社の4月8日の例大祭、5月8日の講社祭に際して執り行われていたが、現在は伝承者の高齢化により、休止状態にある。三峯神社神楽には、座外の演目を加えると14の演目があり、こちらはそれぞれの演目に囃子が2~3曲付されている。楽器は他の徳丸流神楽同様、篠笛・締太鼓・太鼓である。三峯神社神楽の囃子は、神明社神楽同様計22曲で、こちらにも、神楽の始まりと終わりを告げる屋台囃子（異名同曲である《寄せ太鼓》《終わりのちらし》）があり、これを加えると計23曲である。

三峯神社神楽は徳丸からの直接的な伝授ではなく、神明社神楽から伝習したものである。また、浅間神社神楽のように、それ以前に何らかの神楽が存在した上に成立したものでもない。つまり三峯神社神楽は、明治22年の神明社神楽の実態について考察する上で貴重な事例であるといえる。

浅間神社神楽に残されている江戸期・昭和期の史料と、三峯神社神楽の成立年（明治 22 年）という正確な年代を手掛かりにすることで、3 つの同系統の神楽の間に見られる多くの差異が、どの段階で発生したのかを測定することができる。本論文では、秩父地方の神楽の一系統である徳丸流神楽の地域変容について、史料、オーラル・ヒストリー、音楽の観点から考察し、秩父地方における神楽の変容過程の一事例を提示した。

序論ではまず、本田安次による里神楽の分類を参照し、それに対する石塚尊俊の批判と、その乗り越えを行った森林憲史の研究を概観した。次に、森林の研究の問題点を 4 点指摘し、民俗芸能研究における音楽分析の進捗の遅れを指摘した。この進捗の遅れは秩父地方の神楽の研究領域においても同様に見出される。序論では、倉林正次、栃原嗣雄、小野寺節子、三田村佳子、森林憲史らによる秩父地方の神楽の研究史を辿り、徳丸流神楽の通時的研究の必要性を述べた。

本論では神明社神楽の演目分析からその成立について考察し、その後、浅間神社神楽の史料と三峯神社神楽の成立年を手掛かりに、徳丸流神楽の成立と展開の過程を明らかにした。それゆえ本論は「成立」と「展開」の 2 部構成となっている。第 1 部第 1 章「徳丸流神楽概説」では 3 つの徳丸流神楽を概観し、続く第 2 章「神明社神楽における「伊勢神楽」源流考」では、徳丸が手を加える以前の神明社神楽、すなわち伊勢神楽について、できる限りの考察を試みた。前述のように、この芸能に関する史料はほとんど残っていないが、神明社神楽の師匠である濱中彌傳治氏は、豊富な口頭伝承を有している。また前述のように、濱中氏によれば、神明社神楽の冒頭 3 座は伊勢神楽の要素を継承しているという。この章では、冒頭 3 座について考察し、その中の第 3 座「国抵立座」に登場する「天下土君神」（読み方は伝わっていない）という他に類例をみない特殊な神格が、伊勢（三重県）との繋がりを示す証拠となることを示した。そして、「天下土君神」が「お天狗様」と呼ばれていることに注目し、「天下土君神」が、近世以前からの天狗信仰と、近世の伊勢信仰との習合である可能性を述べた。次に、「国抵立座」における《へんぱい》（テケテットン）という囃子に注目し、冒頭 3 座の源流について考察した。

このように第 2 章では、濱中氏をはじめとした神楽師へのインタビューを通して、中世から近世前期にかけての「伊勢神楽」について考察したが、続く第 3 章「徳丸がもたらした神楽と「上州神楽」」では、近世後期の徳丸がもたらした神楽の源流について考察した。まず、旧荒川村に伝承されている「徳丸伝承」について考察し、徳丸が上州方面から来秩した渡り職人か、荒川流域の漂泊民であった可能性を指摘した。次に、徳丸がもたらした神楽がどのようなものであったのかについて考察するために、神明社神楽の第 11 座「蛭児座」^{えびす}の分析を行った。この演目は、恵比寿やヒョットコが釣りをして、鯛（作り物）や多古（着ぐるみ着用）を釣り上げる演目であるが、この演目には、江戸後期の戯作者・浮世絵師の代表的存在である山東京伝（1761 - 1816）の著作に現れる事物が挿入されている。動物等の物真似をまとめた山東京伝の滑稽本『^{はらすじおらむいせき とり}腹筋逢夢石一鳥

獣 ^{けだものうおむしそくもくきぶつみぶりこわいろ}魚蟲草木器物介科口技一』(1810) には、釣りの身振りやタコの身振りといった、「蛭児座」

の所作に類似する物真似が掲載されている。またこの演目には、《高い山から》や《思かざき（岡崎女郎衆）》といった、江戸期を代表する流行歌が用いられているが、後者については山東京伝が随筆『近世奇跡考』（1804）の中で考証を行っているほか、黄表紙『敵討岡崎女郎衆』^{かたきうちおかざきじよるしゆ}（1807）の中でも言及している。興味深いことに、このような江戸期の人口に膾炙した要素を取り入れた演目は、群馬県に散在している。第3章では、「蛭児座」の仔細な分析から、そのルーツが上州（群馬県）方面である可能性を示したうえで、徳丸がもたらした神楽が成立した時期について考察した。

また第3章での分析からは、群馬県からの影響だけではなく、旧荒川村独自の変容の実態も明らかになったが、この発見は第2部で掘り下げられることとなった。第4章からが第2部である。第4章「徳丸流神楽における演目の変容と生成」ではまず、徳丸流神楽における「岩戸開き」を題材とした演目の比較分析を通して、徳丸流神楽が成立以降、どのような地域変容を遂げたのかについて考察した。次に挙げる神明社神楽の「三神和合座」と三峯神社神楽の「三神和合」の分析では、これらの演目が、浅間神社神楽には存在しないことに注目し、「三神和合」を題材とする演目が、神明社神楽の演者によって独自に付加されたものである可能性を指摘した。次に、逆に神明社神楽にのみ存在しない、ヤマトタケル伝承を題材とした演目の分析を行い、浅間神社神楽と三峯神社神楽において、ヤマトタケル伝承を題材とした演目が付加された可能性を指摘した。また第4章では、「秩父神社附属神代神楽」や旧両神村（柏沢地域）の神楽・祭礼、さらに旧荒川村内外の三匹獅子舞や、長野県下伊那郡天龍村の「坂部の冬祭り」などとの比較も行った。なぜならば、他地域の芸能との交流についても視野にいれなければ、芸能の交流が盛んであった秩父地方の神楽の成立と展開のプロセスを解明することはできないからである。

第5章「徳丸流神楽における演目の中断と改編」では、徳丸流神楽における「失われた演目」と「中断・改編された演目」の分析を行った。まず、神明社神楽の「蚕神座」^{かいこがみ}と浅間神社神楽の「蚕神」について、秩父地方の養蚕文化との関係から考察し、この演目が、明治初期から明治13～14年頃までの好況期に成立し、秩父事件の勃発した明治17年から、遅くとも、明治22年までの間には消滅した可能性を指摘した。次の神明社神楽の「三韓座」の分析では、この演目に用いられる囃子《調連》に注目し、そこに幕末の鼓笛隊が使用していた旋律の影響があることを指摘した。そして、神楽師のオーラル・ヒストリーの分析から、この演目が、戦後の国際情勢の変化に従って内容が改められ、「大和開座」^{やまとびらき}として改編され、再度「三韓座」に戻っていく過程を明らかにした。

第6章「結論」では、本論文で明らかになった徳丸流神楽の形成プロセスについてまとめたのち、徳丸流神楽の変容には、常に各時代を特徴付ける信仰や戦争の影響がみられることを指摘した。そして、動態的アプローチからの「民俗芸能史研究」（山路興造）の必要性と、そこでの音楽研究の重要性について述べた。

本論文はその副題を「民族音楽学的芸能史研究」としているが、それは、本論文の分析において、つねに「音楽」が謎を生み、また謎を解く鍵を提供してくれたからである。レヴィ＝ストロースが『神話論理』の第1巻『生のものと火を通したもの』(1964)の「序曲」において、音楽という謎が人文科学の最後の謎であると同時に、進歩の鍵を握っていると述べているが、本論文では、音楽が、民俗芸能の通時的な研究における多くの謎を解く鍵を提供してくれることを示すことができた。その最も顕著な例が、第5章の「三韓座」の分析であったといえる。この分析は、音楽に注目することによって、はじめて他地域の芸能との交流が明らかになる好例である。またこの副題には、史料研究だけではなく、フィールド・ワークに依拠した研究であるという含意もある。無論、フィールド・ワークに依拠しているという点は、関連諸分野の問題意識と重なってくる。しかし、あえて“ethno-”を冠する「民族音楽学 ethnomusicology」に依拠することには、フランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティ Maurice Merleau-Ponty がその著書『シーニュ』(1960)において的確に述べているように、エスノロジーが「他者の学」であることも大きな理由として存在する。民俗芸能を自文化としてではなく、他者の文化としてみると同時に、それぞれの民俗芸能を、他の民俗芸能との関係性からみているという点で、本論文のアプローチは二重の意味で「民族学的」であるといえよう。そして、特にオーラル・ヒストリーに注目しているのも本論文の特徴であるといえる。それによって、史料研究だけでは析出されない関係性なども析出することができた。しかし、フィールド・ワークに依拠した研究ができる時間は長く残されているとは言い難い。前述のように、三峯神社神楽は休止状態にある。本論文では最後に、秩父地方の神楽の通時的な研究において重要な事例の一つである三峯神社神楽の保存・研究の必要性を指摘した。